途中は案外美しい

Midway, Unexpectedly Beautiful

野原万里絵

御殿山での制作記録
2020年3月〜12月

文／野原万里絵

2020年3月の終わり、初めて御殿山生涯学習美術センターの施設を見学に行った。御殿山駅から見える急な坂道を登り到着した、緑に囲まれた、こじんまりとした施設。その雰囲気から、昔、ジブリの魔女の宅急便に出てくる、ウルスラという絵描きの女の子が屋根の上で絵を描く姿に憧れたことを思い出した。そんな施設までの道のりが、私はとても気に入った。

施設の中を見学すると、4つの創作室があった。洋画・日本画・版画と木工・陶芸をする部屋に分かれている。3月末は、新型コロナウイルスの影響で、施設の利用者はいなかったが、創作室は長年使い込まれた空気があった。道具の置き方や、絵の具を流す水場、棚に所狭しと置かれた多種多様なモチーフから、つい最近まで盛んに使われていたことが感じられた。誰もいない創作室だったが、ここに通う人々と何かできそうな予感を持って、その日は帰った。

「アトリエ美術館」という企画展は、作家の造形思考に触れ、交流することを目的として始まった展覧会で、今回で24回目だと聞いた。かなり昔からこの内容で取り組まれていることに驚いた。

私はこれまでも協働制作を各地で行い、このような企画の展覧会で作品を発表してきた。そんな中、この施設で何ができるかを考えた時に、展示会場がいわゆるロビーで、人が多く通る、作品を観る場所というより人々が集う場所であると気がついた。私は展示する環境をとても気にするタイプの作家で、周りの環境から作品を形づくっていくという方法をとる。見学した御殿山の展示環境から、これまでの手法で自分の作品を展示するというイメージが、数ヶ月間全く湧かなかった。

しかし、考え続けてふとした瞬間に、人が各々好きな時間に集まり去っていく、この空間の特徴をそのまま生かし、「公園」に見立ててはどうか？ と思いついた。小さい頃、誰かが遊んだ砂場の跡で続きを作ってみたり、地面に書かれたチョークの線に足して道を作ったり…たくさんの人が行ったり来たりする空間の中で、完成のない遊びを続けてみたいという思いが湧いた。

具体的な作品の構想に入り、「公園」というテーマで作品を作っていこうと決めた。そして、私の思い描く理想の公園のイメージと他者が想像するものにどれほど違いがあるのか、ということを知りたくなった。

そこで、こんな公園あったらいいなというイメージを、「架空の公園」というテーマで大人と子どもから広く集めることとした。周辺商店会や公共施設、学校などに協力してもらいアンケートBOXを18ヶ所設置、googleフォームからも応募できるようにした。近隣の小学校の協力もあり、アイデアは1ヶ月間で約170も集まった。「時間ごとに広さや長さの変わる遊具がほしい」「ワイハイがある公園」「逆上がりが出来たらお菓子の生えてくる鉄棒がほしい」など、私が想像していたものとは違う角度からのアイデアやイラストも多く、アイデアをくれた人をイメージしながら面白く読んだ。

集まった「架空の公園」のアイデアを読んでいると、特に子どもの文字で書かれた、「ジェットコースターやウォータースライダーのある公園」「ゆうえんちがある公園」という内容が多くあったことに気がついた。公園がもっと発展していった形態として、遊園地があり、その最上級としてテーマパークがあるのだ。子どもたちの多くは、壮大な装置を多く提案してくれていた。物理的に実現できそうにないものもあったし、すべてを叶えられるものではないと承知していたが、それらのアイデアは、見えない作品の完成形へ向かい、今後共に制作をしていくオンラインでの協働メンバーとの共通認識のキーワードとして機能するものだと思った。協働メンバーともそのアイデアを共有できるものとして、Instagramのアカウントを作り、アイデアを一般にも公開した。

作品をつくるにあたって、今回も協働制作を取り入れようと、施設の印象やスタッフの方々との話から決めた。これまで私がやってきたように、私の絵に直接手を加えて作品を完成させることも可能だったが、どこかで新しい方法を試してみたいという思いもあった。

イレギュラーだったのは、初めて施設を訪れた３月末から６月中旬まで、新型コロナウイルスの影響で施設は利用できず、利用者の方々の様子を知ることなく展示プランを考えたことだった。プランを考える段階では、この状況がいつまで続くのかが予想できず、人が集まって行うワークショップはリスクが大きいとのことから、保険として考えていたZoomを使ったオンラインでの協働制作を、今回はメインに扱うことにした。それまで私自身は、数回しかZoomを使ったことがなかったので、ビジョンは明確には見えていなかったが、集まったメンバーによって方向性が大きく変わる内容でもあるため、深くは考えずに参加者を募集することにした。

Zoomを使ったオンラインワークショップをしたいと提案しても、現実問題としていろいろと環境を整えていく必要が第一段階としてあった。公共施設でZoomを使うこと、SNSを開設する許可や参加者との連絡手段の方法等、想定していたよりもクリアしていく課題が多く、準備に時間を要した。

そして、募集していたオンライン協働制作メンバーは無事６名集まった。牧野高校文芸部の４名と、イラストレーターの方、建築家の方が参加してくれることとなった。高校生は美術部ではなく文芸部で、イラストレーターの方もいることから、イラストをメインとしたコマ送り動画を作るチーム、建築家の方とは展示空間を構成するチームに分かれて、共に作品をつくっていくことになりそうだとぼんやりと考えていた。

約30年にわたって創作室を利用されている人もいるという、陶芸団体のグループ花窯さんとのワークショップを８月末に開催することができた。事前に団体の先生にお願いすると、当日は大量の粘土を用意してくださっていた。私のイメージでは、余りの粘土を使ってやるくらいのイメージだったので、準備万端な場にお邪魔してしまって、きれいなものができすぎないかと不安もあった。

参加してくださる皆さんには、「お皿やコップ、花瓶などを作る、普段と同じ方法で進めて下さい。良い頃合いを私が判断して止めますから」とお伝えした。何を言っているのか、何を作ればいいか分からないという表情をされていたが、なるべくいつもどおりに進めてもらった。粘土はとてもフワフワして滑らかで、指が吸い込まれるような気持ちの良いものだった。自分でも粘土をこねてみたり、皆さんからの「こんなのでいいの？」という疑問に答えながら、スピード感を持ってどんどん変化する粘土と手付きを見ていた。午前中は、よい形を見逃さないようにするので精一杯だった。何かに見えるわけでもないし、適当に捏ねただけでは生まれないが人工物にはなりきれないような、なんともいえない形が集まった。

陶芸のワークショップは、午後にも午前と同じ内容で別の陶芸団体のやきもの同好会の方々と行った。午後も残って準備してくださった先生が、隅の方で粘土の空気を抜くためにしていた菊練りがあまりに美しくて、作業の前に見入ってしまった。

午後の利用者さんは、私の要求を訳がわからないなりに、具体的なものをイメージして手を動かしてくれた。ボードみたいな形、じゃんけんする手、ビーズのついた家…慣れた手付きでどんどん形成されていた。「なんか分からんけど、頭の体操になるわ～」と言ってくれる人もいた。

その中に、余った粘土でささっと作ったように思われる人形を見せてくれる人がいた。頭には耳がつき、肩から腕が鯛の子のようなボソボソした質感になっている。土俗的な雰囲気があり、作り込みすぎず作らなさすぎず、絶妙なバランスで鎮座していた。自分では到達できないその造形に、とても魅力を感じた。この日一番の好きな作品だった。

初めてテラモトさんに会った時、寡黙な方で、あまり話が続かなかった覚えがある。初対面の人に、自分の作品のことを突然いろいろと聞かれても…という気持ちも汲み取れた。町の小さな公共施設に、「絵描き」というイメージがこんなにもぴったりな方がいるんだと思った。本業は絵描きではないらしく、あくまでも趣味、彼の話し方から暇潰しに描いている、という印象を受けた。いつも入り口のドアのそばで、こじんまりと絵の具と道具を広げて、最低でも週2回は朝から夕方まで黙々と描いている印象があった。幾つか見せていただいた絵は、どれも「テラモトさんの絵」の描き方が確立されていた。下地にチラッと見える鮮やかなオレンジが特徴的で、モディリアーニを彷彿とさせるゆっくりとした筆運びの油彩は、彼の歩き方と同じようだと思った。

そして、会う度に新しいモチーフを組み、絵を描くテラモトさんを何度も見てきた。何を描くか、なぜ描くかという絵描きが問いがちな疑問に、ただ水曜日だから描く、今日は土曜日だから描くといったように、習慣として絵があるような人だと思った。とても自然な佇まいで羨ましかった。

テラモトさんと2回目に会った時から、とても気さくに話してくれるようになった。実際の公園を描いたスケッチも持って来てくださっていた。初めて話した時は、積極的に協力してくれそうにないと思っていたので、話し方から想像した人柄との差が大きい人だと思った。ポツポツと穏やかに話す人だが、絵のこととなると沸々と湧き上がる熱を伝えてくる。私にたくさん描き溜めた絵を見せてくれ、3月に施設が利用できなくなった時には野外で毎日スケッチしてたんだ、と教えてくれた。「ここがなくなると描く場所がなくなってやることがないから困るんだ」とも。

そんな話を聞いているうちに、この施設に来れば、誰かが描いていたり、作っていたりする安心感があり、自分も何か作りたくなる欲求が生まれているんだなと思った。そんな欲求は毎週積み重なって絵となり、自分の家は、通り道が狭くなるほど絵だらけなんだ、と笑いながら教えてくれた。容易に想像ができた。

ミヤムラさんに初めて会った日は、施設のスタッフと一緒に会いに行った。ミヤムラさんは去年の展示も協力しており、センターでは油彩と陶芸もされている方だと聞いていた。ミヤムラさんが描いていた絵を前に、初めてお話した。絵のことはとても恥ずかしそうに話される印象があった。謙虚な方というより、本当に恥ずかしそうにされている感じだ。堂々とした人物の表情が印象的な絵からはそんな風には感じられないので、その自信のなさがとても不思議だった。私はどちらかというと風景画や抽象画を中心に集めたいと当初は思っていたが、ミヤムラさんの他の絵も見たかったこともあり、多く描かれているという人物画を、次回会った時に見せてもらうことにした。

後日、ミヤムラさんが絵を持ってきたと声をかけてくれた。「いや～こんなん恥ずかしいわ」とその日もお話しながら、予想外に大きな油彩画を３枚ほど持ってきてくださった。どれも人物画で色が少し褪せていて、描いてから年月がかなり経っていることはすぐに分かった。先日、創作室で見たミヤムラさんの絵のタッチとはどれも少しずつ違っていて、ねっとりとしたタッチで優しさがあった。どことなくミヤムラさんに似ているような人物が描かれていたので尋ねると、ご兄弟を描かれた絵だった。３人兄弟だそうだ。私は３姉妹で、同じように縦に並んで撮影された写真があるので、この絵の構図にとても親近感を覚えた。ご兄弟とのエピソードも聞いて、ミヤムラさんにとってこの絵はとても大切な絵なんだと感じた。40年前に描いた絵をいまだに保管して、今回わざわざ運んできてくれたということにも、この絵を展示したいという私の気持ちが湧いた。

また、ミヤムラさんは絵の他に陶芸もされ

ているので、このセンターでは顔の広い常連さんだ。陶芸の創作室を覗くと、ときどきお会いすることがあった。上手だとは聞いていたが、想像を超える美しいお皿をいくつも同じサイズで作られていた。陶芸をするとても堂々とした姿をみて、絵の時の恥ずかしそうな笑顔がなぜだか少し分かった。

フジさんと初めて会ったのは、テラモトさんと私が話をしている時だった。フジさんが「これ、この間言ってたやつ」とテラモトさんに小さな油彩画を渡した。私が「それどうするんですか？」と聞いたら、フジさんが「いらんからあげるねん、その上から描けるから」と。絵を見たら、南瓜とピアノが描かれた絵で、上手いというより、とても気になる絵だった。なぜ、ピアノと南京…？ そのことがきっかけで、絵を借りることにした。

フジさんとは、そのあと数回しか会わなかったが、次に会った時もモチーフを組んで描いていた。中央に赤い服を着た人形が青いベンチに座り、花瓶が幾つかと、また南瓜にピーマンなど。背景には薄汚れた布がかけられていて、その光景が忘れられない。また、その人形は、テラモトさんが施設のイベントで数百円で買ってモチーフ棚に寄贈したものだそうだ。気を衒っている訳ではないのに、あんなにインパクトのあるモチーフ組みは見たことがない。絵とセットでみるとさらに異様なインスタレーションとなっていた。絵を見て笑ったのはいつぶりだろうか。狙っても出せないその強烈な空間に、フジさんの絵の面白さを感じた。

最後にフジさんと会ったのは、私が搬入をしている時だった。すでにガラスケースにはフジさんからお借りした作品も飾ってあった。じっと絵を見る姿に、久しぶりに会ったこともあり、初めは誰だか分からなかった。「捨てなくて意外とよかったわぁ～」と話されて、フジさんだと気がついた。そういう感想をもらえて、飾ってよかったと思った。搬入中に協働制作で来た高校生も、フジさんのその絵をじっと見て、この絵が一番好きだと言っていた。机の位置が一般的な構図より高くて、描き方も面白いと。その子も美大を受験するためにデッサンを描いているようだったので、その不思議なモチーフの描き方に惹かれたのかもしれない。

施設のロビーで作業中、スタッフの方がガラスケースの中で特徴的な台に乗って展示作業をされていた。その台が気になったので聞いてみると、「跳び箱」と呼ばれるものだそう。本来の使い方は知らないが、作業台として使っていると聞いた。この施設には、本格的な塑像をするための台や、高さの違う作業机や椅子など、年季の入った備品がたくさんある。その点も、他にはないここの魅力だと思い、展示にも備品を多く使うことにした。

また収蔵庫には、枚方市の収蔵品があると知った。こじんまりとした保管庫に入ってみると、前田藤四郎の「明石原人の海」という版画作品のエスキースと思われる小さい版画があった。大阪国際がんセンターにあると聞いて、以前から見てみたかったものだ。その他にも、たくさんの小さな版画が保管されていたが、なかなか展示する機会がないと聞いた。こんなに心躍る作品やエスキース、どうにか一緒に展示できないかと考えたが、今回は趣旨とは外れるため、残念ながら断念した。

展覧会が近づいてきて、自身も何か作るべきか悩んでいた時期があった。普段であればドローイングがどんどん描けて、ノートが線で埋まっていくが、今回は全くペンが進まない。フライヤーに使うためにドローイングを描いてみるも、よそ行きの顔をした絵が並ぶばかりだ。

そんな中、9月中旬にはレジデンスのため青森に行くことになり、御殿山を離れた。オンラインでの協働制作を残して飛び立ったが、本格的に皆がバラバラの場所から作ることになったと実感した。

青森に到着して、自然の中で石や木がゴロゴロと溢れる場所で暮らすと、身の回りには手をつけなくてもおもしろいものが溢れているのだと改めて感じた。海辺で様々な色の石や流木を見つけ、色を塗りたくなったものには着色してみる。キャンバスの下地が、たまたま滝の流れのようにきれいに塗れたときは取っておく。そんなふうにして、作りたい気持ちの赴くままに、青森では展示作品のパーツになり得るものを集めていた。

今回の展覧会タイトルは、今までで一番難航した。一人でつくる展覧会ではなく、様々な種類の協働制作と多くの人の作品が加わってできる展覧会、その全貌を限られた文字数で言い当てたいという思いが強かった。複雑な状況の中で苦戦し、自分でもまだ完成形の見えない作品に不安な中、もし展覧会を終えてこう思えていたらいいなという期待も込めて、「途中は案外美しい」と付けた。それは、陶芸団体の方々との粘土を捏ねる作業の中で、「完成途中で止めてもらって大丈夫です」「お皿を作る途中の感じがいいんです」と私が何度も話しかけていたこともヒントとなった。

また、これまで絵を描く曖昧な制作過程に関心を持って制作を続け、油絵という自身にとってある意味憧れのような存在に近づく過程で立ち止まり、その都度、取りこぼされているような部分に焦点をあてて作品をつくってきた私の考えを広く包括して表しているものでもあると思った。

協働制作メンバーとなった１組は、牧野高校の文芸部からの応募だった。公立高校からネットを繋ぐことは想定していなかったが、学生の方が興味をもってくれて嬉しかった。部活の時間に参加してくれることとなり、顧問の先生の立ち会いのもと、学校のiPad１台から４名の女子高校生と繋ぐこととなった。

今となってはいい思い出だが、接続が上手くいかず、何もできずにZoomミーティングを終了した日があったり、なぜかネット環境が安定している、苔の美しい高校の中庭から繋いでくれることもあった。その他にも、放課後の限られた時間で話すことになるので、先生も含めたLINEグループを追加の連絡手段として取り入れた。

制作当初、４人で１つの作品を作りたいという話があったが、何重にも協働制作が組み合わさるややこしさがあるので、１人１テーマで作品を作ってもらうことにした。イラストが得意ということもあり、全員イラストから作品を作ることにした。コマ送りの映像を

目標に、夏に募集した公園のアイデアの中から、「魔女になれるトンネル」「逆上がりが出来たらお菓子の生えてくる鉄棒」「宇宙船みたいな遊具」「虹色の滑り台」を各自がテーマに選んで、パラパラ漫画の方法で紙に絵を描いてくれた。高校生は、ラフスケッチからとても凝った絵を描いてくれたが、どれも最終形までに何百枚と描くことになるイラストだった。その度に、シンプルな形で動きが面白くあること、説明的な絵にならないようアドバイスとして伝えた。頭でイメージすることと実際に実現できるものの間には大きな落差があり、イメージにできるだけ近づくようにどう描けばいいかを考えることが楽しくもあり、難しいということを伝えながら制作した。

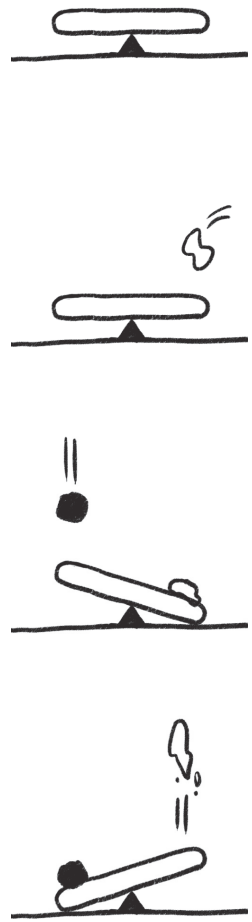
最終的には、「魔女になれるトンネル」と「逆上がりが出来たらお菓子の生えてくる鉄棒」のイラストから動画を完成させ、「宇宙船みたいな遊具」と「虹色の滑り台」はペインティングにする方が魅力的だと思い、計画を変更して完成させた。

オンラインの協働制作メンバー２組目は、枚方市でイラストレーターとして活動されているタカオさんという方だった。私と年齢も近いそうだが、Zoomの画面からはとても落ち着いた優しい雰囲気が感じとれ、高校生との歯痒いやりとりを微笑ましく見守ったり、私の作業量を心配してブレーキをかけてくれる存在だった。

タカオさんも途中までは高校生と同じ手法で、「空まで飛べるシーソーのある公園」というアイデアをもとにコマ送り動画を作ってもらうことにした。タカオさんは普段からiPadでイラストを描いておられることもあり、最後まで一人で動画を作ることができる技術があった。ただ、壁ではなく実物のものに動画を投影させたいという私の思いがあり、シーソーを絵で描くのではなく、私が青森で拾った流木をシーソーに見立て、そこから抽象的な形が空まで飛んでいくようにしてほしいとオーダーした。

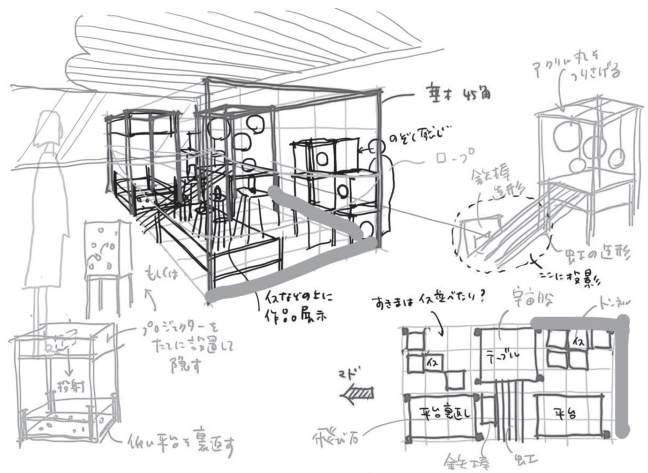
完成した作品を見て、スライムのような抽

象的な形が動いているにも関わらず、ネコやハムスターなど、具体的な動物の動きを連想させるという感想があった。タカオさんは、普段はネコなどの動物のイラストをとても可愛らしいタッチで描かれる作家で、今回はあえてその形を封印したにも関わらず、ネコを連想させる動画が完成したというのは、とても興味深いことだと思った。



オンラインの協働制作メンバー３組目は、５年前に新潟のアートプロジェクトで初めてお会いした、建築家のホンマさんが参加してくださった。これまでの私の作品を知ってくれている唯一の参加者だ。Zoomミーティングでは、お忙しい仕事の合間に車から繋いでくれていて、どこからでも遠隔で参加してくれてありがたかった。

ホンマさんとは、他の参加者の作品が進んできた搬入前に、一気にやり取りを進めた。私が撮影した施設の備品の写真をもとに、それをロビーに組み立てる構造を手書きの図面で送ってくれた。机を逆さにして、脚を支柱に木材を組み立てる、という方法は自分では思い浮かばない案でさすがだと思った。高校生の作った動画も、作業椅子の穴から覗けるようにして見えたら、トンネルみたいで面白そうなどと、搬入中でも夜な夜なメッセージをやり取りしてアドバイスをもらっていた。物理的にも心理的にもバラバラのパーツを一人で組み立てたり、この慣れない状況と向き合う中で、同じ作家としてその難しさを共有できる相手がいたことは、それだけでとても心強かった。



展示の搬入期間を10日間と長めに設けてもらった。搬入のために青森から約2ヶ月ぶりに施設へ向かった。顔見知りとなった利用者の方々とも、久しぶりの再会となった。大量の画材や材料を持ち込み、展示場所のロビーで荷物を広げていると、連日そこを通る人々が、何が始まるのか不思議そうに見ていた。まだできていない作品にアドバイスをしてくれる人もいたし、備品の机が足りないから返してほしいと言ってきた人もいた。毎日施設を訪れて、ギターを弾いたり利用者の方々と談笑されている方が、頑張ってるからとコーヒーとお菓子の差し入れに、ポットも連日貸してくれた。搬入に集中できない環境ではあったが、そんな風に気軽に誰とでも話したり助け合ったりしながら、ものづくりのできる場所が身近にあることは、とても羨ましく思った。差し入れていただいたお菓子のおかげで、公開ワークショップの皆さんともリラックスして過ごし、生活や将来の話にも華が咲いて、とてもありがたい時間となった。

搬入6日目、牧野高校の美術部5名と顧問の先生が公開制作のワークショップに参加してくれた。この日の作業の内容は、作品の配置はほぼ決まった公園の中のモチーフに色を塗っていくというものだ。当初は窓ガラスに絵を描く内容だったにもかかわらず、私の気分が変わって内容を変更したことにも快く応じてくれた。高校生は、それぞれが持参したカラフルなツナギに着替えてくれて、視覚的にチーム感が増した。

この日の作業は、インスタレーションを囲う柵に見立てた角材を塗る、黒板色に塗った板に迷路を描く、サッカーボールに色を塗るという、主に3種類の作業があった。説明すると、皆はすぐに理解したように頷き、3チームに分かれてくれた。その雰囲気はとても頼もしく、短い時間で完成できるか不安もあったが、今日は大丈夫そうだと確信をもった。

作業がはじまり、皆の動きを見ていると、角材を塗るチームが気になった。パステルカラーの絵の具を大量生産して、淡い木肌が、

ポップなアクリル絵の具で埋め尽くされていく。自分のイメージとかけ離れていくことは間違いないが、どのように方向転換すべきか、なんと声をかけたらいいかを迷った。もし自分が高校生で、何色でも塗っていいと言われたらカラフルな色にするよなとも思った。

作業を眺めてしばらくして、「自分が塗る」ということではなく、公園にいるいろんな人をイメージして描いてもらえばいいのかもしれないと思いついた。例えば、高齢の方がこの公園に来たらなど、自分ではない誰かをイメージして、人格を入れ替えるように描いてほしいとオーダーした。その思考を取り入れることで、一気に高校生の色使いや筆の動きが変わった。無意識に上から下に筆を下ろして描いていた人は、意識的に下から上に筆を動かして描いたり、筆の種類を変えたり、全体のバランスをお互いに確認しながら塗ってくれていた。多くの人が公園に来て付けた、足跡のような痕跡を限られた人数で表現するには、それらの方法が効果的に働いた。

搬入７日目、２名の女性が公開制作のワークショップに参加してくれた。初めてこの施設に来た方と、生前にお母様が施設の利用者だったという、お友達同士での参加だ。たくさん用意したアクリル絵の具やメディウムに、始まる前から喜んでくれていた。

この日の作業は、施設の備品の上に置く、色のついた小さなパネル３種類を完成させることだ。その上には粘土の作品を置くことも想定していた。作業を始める前に、好きに絵を描くのではなく、展示する場所がすでに決まっている作品の色彩や背景の景色を加味して色を塗ってほしいということを伝えた。言葉だけではいまいち伝わっていないと感じ、展示場所の位置につき、様々な角度から作品を見ながらも説明した。

そして絵の具に取り掛かり、何度か色を塗り重ね、仮で展示してみるという行為を繰り返していくうちに、「窓の外の落ち葉のイメージをパネルにも描いていこう」「ケーキのような粘土の作品の下に置く、カラフルなお皿にしよう」など、アイデアも具体的に浮かんできた。展示している粘土を入れ替え、半円を描いたパネルには岩のような造形の粘土を置いて石庭に見立てたりもした。その光景は、ままごとをする子どもたちを彷彿とさせた。

展覧会初日の夕方、オンライン協働制作に参加してくれた牧野高校の生徒と顧問の先生が展覧会を観にきてくれた。ロビーの端に座る１人の高校生に初めに気がついたが、それが参加してくれた牧野高校の子だとは話しかけられるまで分からなかった。Zoomの画面から想像していたより、みな小柄で、実際に会って話していると、高校生のあどけない雰囲気が感じられた。画面を通して話していた時は、表情は分かるものの、こちらの意図が伝わっているのかが読み取りづらいため、大人のように接して、高校生に無理難題をたくさん提案していたなと、少し反省した。

展覧会場で作品の最終形態を初めて観た高校生たちがどう思うか、とても不安だったが、自分たちの作品が私の手によって少し飛躍した状態を好意的に観てくれたようで、一安心した。コマ送りの絵をiPadで動画にする方法をいっしょに見たり、他愛もない話をしたりと、遠隔でのコミュニケーションのもどかしさを乗り越えた仲間との再会となった。

展覧会３日目、アーティストトークの準備をしていると、２人の男性が展示していたガラスケースの中の絵を見ていて話しかけられた。以前から知っている塑像をされる利用者の方が、隣にいる人は絵も描かれる方だと教えてくれた。絵を描く人が、「何でこの絵は額装してあげないんや？」と尋ねてきた。私はどういう意味かな？ と思った。その作品は展示のガラスケースに入っているし、触られる心配もない。理由を聞くと、「このまま展示されたらみっともないんちゃうか？ 額をつけるんは古い考えやと言いたいんか」と。私は、テラモトさんやミヤムラさんが描いた絵を素晴らしい絵だと思っていたし、額装されていなくても十分見応えのあるものだと思っていたので驚いた。その人が言わんとすることは分からなくもないが、額装されているか、されていないかで絵の価値は変わらない、キャンバスの側面も見えるこのままの姿が一番だと意地になって伝えた。それぞれの考えがあるという話でその場は落ち着かせたが、一連のそのやり取りは、いつか直面しそうな話だと思っていたし、このタイミングまでよく出てこなかったなとも思った。夏の協働制作の時に、女性で構成された陶芸団体の方々が、「男性がいると威張るから」とポロッとおしゃっていたことを、その時思い出した。

展覧会が始まって４日後にはレジデンス中の青森へ戻ったり、新型コロナウイルスにより展覧会期が１週間短縮となったこともあり、観客の反応を直に感じる機会は少なかった。そんな中でも印象的だったのは、ガラスケース内に展示した作品のこと。普段から施設を利用している人であれば、誰が描いた作品かが何となく想像できている人もいたし、施設を初めて訪れた人の中には収蔵品だと思っている人もいた。また、展示に多く使った備品に関しては、利用者の方にとっては見慣れた備品で、なんでこんな物をたくさん使うの？ と思った人もいたし、外から来た人は、こんな可愛らしい備品があるんだ、これが使えるなんていいね、と話している人もいた。

誰かにとっては見慣れた景色が、他の人にとっては輝いて見えたりすることが、この世にはたくさん存在していると思う。私はこの施設に何度も通って、そのままの日常の風景が一番面白いと何度も思ったし、その光景や存在を多くの人に知ってもらいたいと思った。御殿山の日常をすくいとり、並べなおすという方法で、自身が前に出過ぎずディレクターのように動いて作ることを経験した。自分の展覧会だけど、個展とはまた違うという不思議な感覚が、今も続いている。

展覧会

枚方市立御殿山生涯学習美術センター企画展
アトリエ美術館 vol.24 野原万里絵展
「途中は案外美しい」

会期：
2020年11月13日（金）～12月6日（日）

会場：
御殿山生涯学習美術センター
枚方市御殿山町10-16

主催：
御殿山生涯学習美術センター
指定管理者：枚方まなびつながりプロジェクト
（代表企業：大阪ガスビジネスクリエイト株式会社）

助成：
公益財団法人 野村財団
アーツサポート関西

アートアドバイザー：
伊藤まゆみ（京都精華大学展示コミュニケーションセンター特任講師）

協働制作者：
本間智美
タカオエリ
牧野高校
グループ花窯 やきもの同好会

協力：
御殿山渚商店会 創美会
寺本常男
宮村成福
藤哲朗
堂山みちえ
西澤光子

記録集

発行：御殿山生涯学習美術センター
発行日：2021年3月
写真：麥生田兵吾（Umiak）
英訳：hanare x Social Kitchen Translation
編集：竹内厚
デザイン：髙橋静香（KUSUNOKI WORKS design）
印刷：アサヒ精版株式会社

Arts Support Kansai　NOMURA 野村財団

クショップ慣れした大人の参加者が多いことも確かだった。私もどこかで上手くいくと安心しながら進め、大きくコケることなく作品にする方法を、現場でのワークショップでは手に入れていた。

今年になって出現した社会状況によって新たに選択したオンラインの協働制作ではあったが、図らずも自身のこれまでのパターン化した協働制作の手法を突きつけられ、想定外すぎる方法に太刀打ちできないことも実感した。

今回の複雑な環境を経験し、ある意味マイナスからのスタートのような気がしてならなかったが、その状況がなければ、協働制作の可能性を広げてくれることはなかったように思う。この展覧会を通して、まだまだ試していないことだらけだと、自身の協働制作に期待を持って終えられた気がしている。

文／野原万里絵

野原万里絵 ／NOHARA marie

1987年大阪府生まれ。
2013年京都市立芸術大学大学院 美術研究科 絵画専攻（油画）修了。
絵画を描く際の感覚的かつ曖昧な制作過程に関心を持ち、自ら制作した定規や型紙などの道具を用いた絵画作品を制作・発表している。
近年の主な展覧会に、2020年「整頓された混乱」（gallery TOWED／東京）、2019年「飛鳥アートヴィレッジ 2019 回遊」（奈良県立万葉文化館 展望ロビー／奈良）、ワークショップ・展示「いろんな道具で描く、どこまでも長く、ずっと続く絵」（トーキョーアーツアンドスペースレジデンシー／東京）、2018年「絵画の現在地」（500m美術館／北海道）。

パターン化した協働制作を抜け出して

私の作品は、5年ほど前から作品の制作過程に積極的に他者を巻き込み、絵を描くという協働制作の方法をとってきた。その理由は、例えば木炭や顔料を使ったスケールの大きな絵画作品であれば、川の流れや海の波、雨水によって岩石が削り取られる侵食や、温度変化や水の影響で岩石が脆くなり崩れていく風化といった自然現象を絵画にも起こすというイメージで、自身では起こせない現象を意図的に他者に委ねているからである。四角い絵の外に広がる遠心的空間を自身が作ることを制限し、他者が直接作品に手を触れて描くという行為を取り入れて、整備と整理を繰り返しながら作り出してきた。そんな私と他者の関係性によって発生する多様性を、どのような思考や方法で統一性をもたせていくか、自身の物差しをもとにバランスを測りながら作品を作ることに重点をおくことにおもしろさを感じている。

そのようにして、作品に他者の手が加わることにより、出会うことのなかったかもしれない人々と話して思考や方法を拡張させ、一人では届かなかった場所に絵を連れてもらってきた。

今回のオンライン協働制作をメインにした制作過程で、何度も慣れない手法の難しさに直面し、少し気分が落ち込んでいたこともあった。そんな中、ある方とのオンラインミーティングでその気持を伝えていると、現場でのワークショップには参加できない人もいて、きっとその人たちにもオンラインは今後開かれた方法になっていくから頑張って、という言葉をもらった。その話を聞いて、目から鱗だった。ワークショップに参加してみたいけど自宅から出ることが難しい人、大勢の人がいる場所に出向くことが難しい人もいれば、決まった時間までに準備して家を出てワークショップ会場に向かうということが億劫に感じられることだってあるだろう。

これまで何度も協働メンバーとZoomを繋いで話していたが、もしかしてこの中にも、そのような人たちはいるかもしれないと思うようになってからは意識を変えて、この手探りの状態を楽しみながら臨むことができた。実際に、これまでのワークショップでは、リピーターの子どもが多かったり、ワー

他者と共に創る喜び

伊藤まゆみ（京都精華大学展示コミュニケーションセンター特任講師）

御殿山生涯学習美術センターの恒例企画「アトリエ美術館」の24回目は、画家の野原万里絵を迎えることとなった。本センターの美術事業のアドバイザーを務めて3年目に入り、アドバイザーの立場から、センターが企画運営のノウハウを蓄積し、主体的にプログラムを展開していけるよう、作家のみならず、センターのスタッフにも伴走するような気持ちで今回関わらせていただいた。野原とは、私が神戸アートビレッジセンター勤務時代の2013年、若手芸術家育成事業で展覧会やワークショップの仕事をご一緒し、その後も、私が勤務したトーキョーアーツアンドスペースの子ども向けワークショップに繋げたり、各地の展覧会や芸術祭での彼女の作品や仕事ぶりを見続けてきたことから、この「アトリエ美術館」でも、その手腕を発揮してくれるだろうと期待していた。

この御殿山生涯学習美術センターは、ギャラリーとして区切られた空間が存在せず、施設の利用者が行き交うロビーにガラスケースや可動壁が備えられ、美術館のように作品に集中して鑑賞できるよう整備された空間がない。また、現代美術の企画を重ねてきているが、関西のアートシーンのなかでギャラリーとしての認知度も高くはない。アーティストとしてこの環境下で何ができるか、どうしたら面白い仕事ができるか、自身のキャリアにしていけるか、悩ましく思うのが必然だろう。しかし、いわゆる「アートワールド」的な価値観から離れてこの施設を眺めてみると、その特徴ともいうべき、洋画、版画、日本画、陶芸等の本格的な作品制作が可能な各創作室では、連日熱心に創作を行う地元の利用者で賑わっている日常に気がつくことになる。

野原は、その利用者たちの様子に着目し、この場に集い、創作や文化活動を自由に楽しむ彼ら・彼女らの様子を公園に重ねて、本展のテーマを「架空の公園」とした。事前に広く一般に理想の公園のアイデアを募集し、そのアイデアをセンターの利用者やオンライン上での協力者との協働作業により、子どもの頃の遊び心を想起させるようなインスタレーションの制作を試みた。

本展が始動しつつあった2020年3月は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け緊急事態宣言が発出される直前で、利用者の来館も減りつつ、施設も休館になろうとする頃であった。私自身、「協働制作」と言えば、直接的な他者との関わりのなかから生み出されるというイメージが強く、人との接触を減らさざるを得ないコロナ禍において、ワークショップやイベント実施に対して少々自粛モードになっていた。野原は、Zoomを使ったミーティングや、Facebook、Twitter、LINEなど、SNSツールを駆使して、協働制作者の高校生や、地元のイラストレーター、府外在住の建築家などとやりとりを進めていった。オンライン上でのやりとりは、場所の制約を受けない利点もあるが、相手にどこまで伝わっているか把握しづらかったり、細かな認識のズレが生じていたりと不安を感じた場面もあったことだろう。今回のオンラインでの協力者や利用者との協働制作のエピソードは、本冊子の野原のテキストをぜひ読んでみてほしい。

他者とのコミュニケーションをとおして、作品の可能性を模索してきた野原にとって、この時、この場でしか成立しない今回のセンターでの協働制作の経験は、自身の作品を発展させる有益な経験となったことだろう。

感染症の収束が見通せない特殊な日常のなかで、純粋にものづくりを楽しむ利用者たちやオンラインを介した多彩な創作者たちとの交流によって創り上げられた「公園」は、私たち鑑賞者に子どもの頃の遊び心や創造する喜びを思い出させてくれた。

展覧会に関わったひと、協働制作した人たちの声

普段から異業種のコラボレーションを軸に制作していることもあって、たまに違う人と制作するのも面白いかなと協働制作に応募しました。オンライン制作でどんなものができあがるのかという興味もありました。空間を一度も体感せずに制作したのは初めてですが、私がギリギリで出したアイデアが野原さんの捉える空間のなかで組み替えられて、当初想像もしていなかった作品になったようで驚きました。

—

ホンマさん／協働制作

オンラインのやり取りと野原さんの指示ありきでの制作、私の立ち位置は難しく感じるところもありました。ただ、オンラインだから参加できたとも思っています。YouTube でのトーク動画も見てたけど、展覧会が始まって実際に会場に行ってみるまでどんな展示になってるのか不安もありました。私がつくった動画なんだけど、自分ひとりの展示では実現しなかっただろうなと思いました。

—

タカオさん／協働制作

「自分の作品の展示を見た時は、ちゃんとした作品になってるなぁと思いました。難産だったのに、やるじゃん自分（笑）」「自分の作品が展示されているのを見ると、そうなるのかと興味深かったです」「やったことのないアニメーション制作は苦戦しましたが、何度も訂正してできあがった作品を見たときはうれしかった」「展示の仕方に工夫があって、見ていて楽しかったです」

—

牧野高校文芸部の学生たち／協働制作

若い野原さんが教室に見えられて、土に対する感覚が新鮮なその様子を見て、私たちも驚いたり、楽しかったです。

—

グループ花窯／協働制作

「ほとんど規制のかからない美術は久しぶりだったので、難しかったが楽しく参加できました」「野原さんの話が面白くて新鮮で、枚方ではない新境地にいる気分でした」「遊びたくなるような、なつかしいような、子供の頃に戻りたくなるような、時間が巻き戻ってほしいな〜と思う展示した」「子どもが描いたように板を染めていき、最初はどうなるのかなと思ってましたが、最高の出来でした！」「自分自身も絵を描くことの楽しさをあらためて感じることができました」

—

牧野高校美術部の学生たち／協働制作

子どもに戻ったような気持ちでした。グーチョキパーの手の形をつくっているメンバーもいたりして、普段つくらない形だったから、いい機会でした。展示もわくわくして見ました。

—

やきもの同好会／協働制作

別の講座を申し込むつもりが定員いっぱいだったので、ちょうどこちらのワークショップが募集をしてたので申し込みました。絵の具なんて高校生以来だったり、初めて触るものも多かったけど、野原さんもフレンドリーで楽しくやれました。近くに住んでる私もこのセンターの存在をよく知らなかったので、もっと気軽に足を運ばれる場所になるといいですよね。

—

オカダさん、イケダさん／公開ワークショップ参加

作品の展示は恥ずかしかったですよ。古い絵だしな。展示は僕にはむずかしかったかな。どうしても備品に目がいってしまって。あの机はどこの部屋のやなとか。見慣れてるから。あまりにいろいろな要素があったから、野原さんの話を聞いてみたかったね。

—

ミヤムラさん／油絵を借りて展示

展示を見るのはうれしいやら恥ずかしいやら……家にあるとジャマな作品だなと思ってたんだけどね。

—

テラモトさん／油絵を借りて展示

▶QRコードを読み取れば、リンク先のテキストを今でも読むことができる。

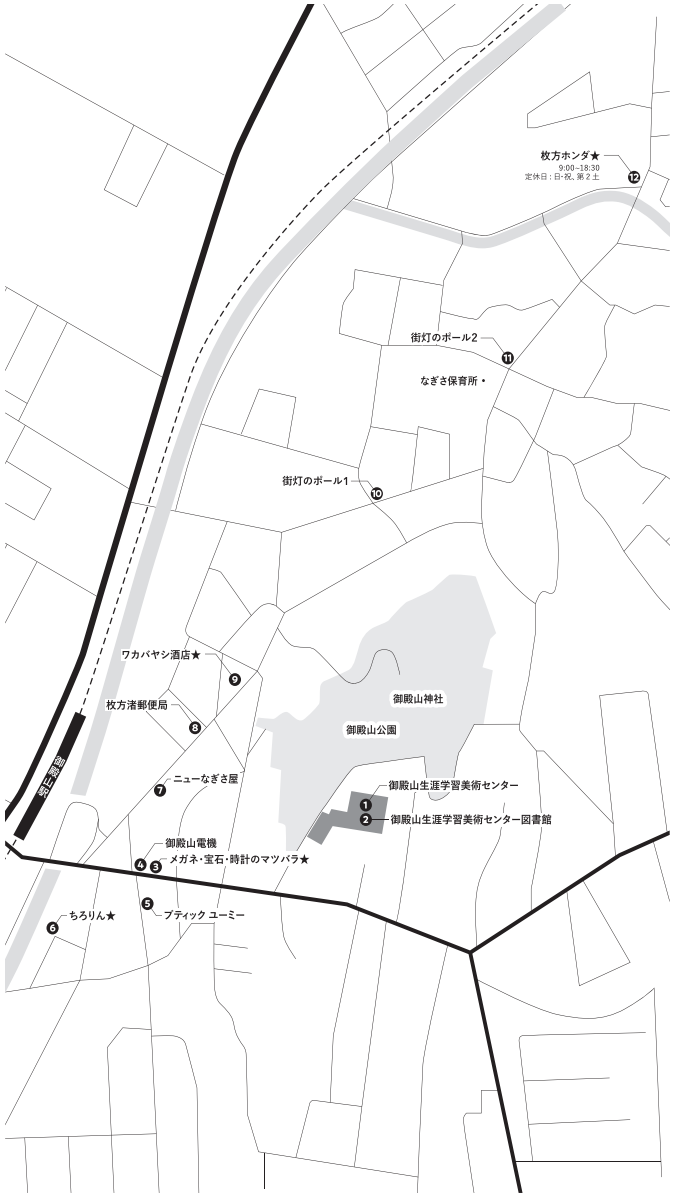
周辺商店会での展開について

御殿山駅周辺には、御殿山渚商店会がある。商店会に登録されている店舗が、毎年「アトリエ美術館」の展示協力店舗になっているらしく、そちらにも展示をしてほしいとの話があった。

商店会を巡ると、電機屋や喫茶店、クリーニング店など、いろいろな業種の店舗があると分かった。外観としては大きなウィンドウがあり、中が見えるお店が多いが、初めて入るには勇気がいる。観に来てくれた人が、同じようにその気持ちを経験してから作品を観るという流れが、私はどうも気にかかった。閑散とした商店街で、お客さんが来ない街ならまだしも、訪れている間にも、店にはお客さんのは出入りがある。店主の方も忙しそうで、ゆっくり話してコミュニケーションを取りながらアイデアを膨らませるという、これまで私がやってきた方法が合わないと直感的に思った。なぜここで展示をするのか？ということがずっと引っかかっていた。

そのようなことをずっと考えているうちに、作品をここで展示するのではなく、展示会場ですべては伝えられないことをここでは表現したいと思った。そこで、店舗の外壁にQRコードを貼り、それをタブレットで読み取れば、展覧会にいたる制作過程の話が分かる仕組みを作った。ポイントとなる12ヶ所のうち4店舗では、ドローイング入りのエコバックの配布店舗としたので店主の方々と話す機会がある。展覧会に来てくれた知人から後日感想をいただいた中に、私が気になっていた酒屋さんで売っている豆腐を買ったよという方や、久しぶりに駄菓子屋に行って大人買いしてきた！という友人もいた。普段なかなか訪れることのない街で、小さなお土産片手に帰る、少し特別な日になっていればうれしい。

（野原万里絵）



ある日の創作室2、机の上に頭部の彫像が無造作に置かれていた｜00.00撮影・b

手前に見えるのは「ドウヤマさんの描いた、むべの絵」。センターの作業机や椅子などの備品を展示に活用、粘土の造形の下に敷いたキャンバスは、搬入中の公開ワークショップでつくったもの｜展示風景・a

野原がふと手を動かしてアクリル絵具を着色したキャンバス。このまま展示作品となった｜10.00撮影・b

センターには4つの創作室がある。洋画に利用される創作室1の様子｜00.00撮影・b

c

b

c

指のかたちをそのまま残した粘土は陶芸団体とのワークショップで生まれたもの。椅子の下には黒板に描いた迷路｜展示風景・a

20年9月21日撮影。
牧野高校と協働制作した映像はスツールの穴から見える形に。
スツールの穴から見える形に。

角椅子の丸い穴の奥で「逆上がりが出来たらお菓子の生える鉄棒」のコマ送り動画を展示。牧野高校文芸部との協働制作｜展示風景・a

c

上：ニシザワさんの描いた柿の絵｜展示風景・a
下：フジさんの描いた静物画・｜展示風景・a

センターの利用者からお借りした油彩画8点をガラスケース内に展示。その下には、絵、粘土造形、石、木を組み合わせた作品を置いた｜展示風景・a

左手前に見えるのは牧野高校美術部と協働制作して虹の滑り台。展示会場をp89と真反対に見た景色｜展示風景・a

上:やきもの同好会とのワークショップで生まれた造形、じゃんけんする手｜00.00撮影・b
下：陶芸団体とのワークショップで生まれた造形｜00.00撮影・b

展示会場の中央で柵の役割を果たした角材。牧野高校美術部と色を塗った｜展示風景・a

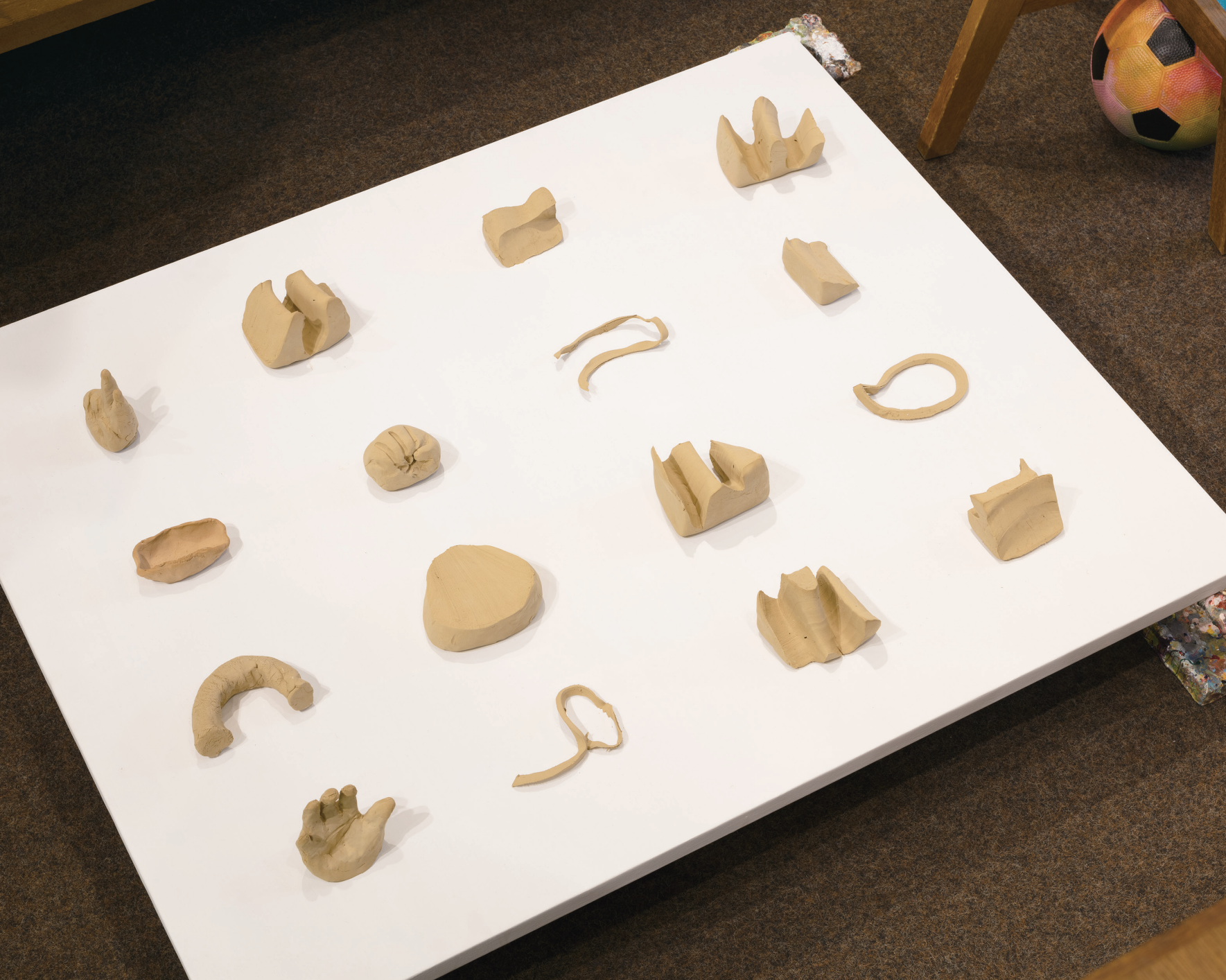
センター利用者のひとり。フジさんによる静物画の制作風景｜00.00撮影・b

やきもの同好会とのワークショップで生まれた造形も展示に活かすことに決めた｜00.00撮影・a

やきもの同好会、陶芸団体とのワークショップで、参加者の制作途中に野原が声をかけて制作を止めてもらったものを並べた｜展示風景・a

創作室4の様子｜00.00撮影・b

撮影者　a：麥生田兵吾　b：野原万理絵　c：その他



Midway, une

DICO
DICO

Preface

Started in 1998, “Atelier Museum” is a series of special exhibitions organized every year with an emphasis on “making.” This year, for its twenty-fourth edition, the series welcomed Marie Nohara, a painter whose practice has explored new possibilities for art through communicating with others, and who has exhibited many collaboratively produced artworks.

Associating how people gather and freely enjoy creative and cultural activities at Gotenyama Lifelong Learning Art Center with the concept of a park, Nohara set “imaginary park” as her exhibition theme.

Based on the responses widely submitted by children and adults to the question of what an ideal park would look like, Nohara created pieces of art at various places in partnership with the center’s users as well as online collaborators. The exhibition space where the gathered artworks “parts” were brought together with the venue’s fixtures showed the everyday life of Gotenyama. The scenery created by Nohara’s works evokes a forgotten playfulness and conveys the charm of the center not only to those visiting for the first time, but also to its regular users as well as members of staff who are familiar with artworks and the facility.

In closing, we would like to express our heartfelt gratitude to everyone who has assisted with the organization of the exhibition and the publication of this catalogue.

Hirakata City Gotenyama Lifelong Learning Art Center

ごあいさつ

「アトリエ美術館」は1998年より毎年開催している「つくること」をテーマとした企画展です。第24回目となる今回は、他者とのコミュニケーションを通して芸術の新たな可能性を模索し、協働制作による作品も多数発表している画家の野原万里絵を迎えました。

野原は、御殿山生涯学習美術センターに人々が集い、創作や文化活動を自由に楽しむ様子を公園に重ね、本展のテーマを「架空の公園」としました。

子どもから大人まで広く募集した理想の公園のアイデアをもとに、さまざまな場所で野原が当センター利用者やオンラインでの協働制作者といった参加者とともに創り上げ、集めてきた作品のパーツが、当センターの備品とともに一堂に集結した展示空間は、「御殿山の日常」ともいえる姿を映し出します。忘れかけていた遊び心を想起させるような野原の作品が生み出す景色は、この場所を初めて訪れる方だけでなく、作品や備品を見慣れた当センターの利用者や私たちスタッフにも、御殿山生涯学習美術センターの魅力を伝えてくれるものとなりました。

最後となりましたが、本展の開催および本記録集を発行するにあたりご尽力いただきました全ての方々に深く感謝いたします。

枚方市立御殿山生涯学習美術センター

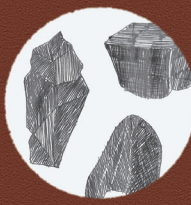
途中は案外美しい

Midway, Unexpectedly Beautiful

野原万里絵

枚方市立御殿山生涯学習美術センター企画展
アトリエ美術館 vol.24

枚方市立御殿山生涯学習美術センター企画展 アトリエ美
途中は
案外
美しい
Midway, Unexpe
野原万里絵 展
2020年11月13日(金)－12月
ごあいさつ
枚方市立御殿山生涯学習美術センター
協働制作者
木閑製菓
タカネエリ
牧野高校
グループ花束
やきもの同好会
協力
寺本常男
宮村琢海
藤智麟
宮山みちえ
西澤光子
御殿山連棟店会
助成
アーンサポート関西
公益財団法人野村財団



途中は案外美しい

Midway, Unexpectedly Beautiful

野原万里絵

枚方市立御殿山生涯学習美術センター企画展
アトリエ美術館 vol.24